令和８年度　第２回　松本「シンカ」推進会議　要旨

日時：令和８年９月２８日（月）
午後６時００分～
会場：松本市立博物館講堂

１　開会

２　座長あいさつ

３　議題（資料１）
「“学び”ってなに？－「学都松本」の見える化に向けて、“学び”を聞いて、話して、広げる回－」

⑴　キートーク（資料２）
手塚委員、藤原委員、二瓶委員、宮木委員より話題提供

⑵　クロストーク
３グループに分かれて意見交換

⑶　リレートーク
当日の話題について共有

⑵　クロストークでの主な意見

- 経験があって、価値の行き交う瞬間が楽しい。学び＝場づくり。
- 何を学んだかは、個々に違ってよい。
- 松本には、人材がいて、応援する人がいる。その化学反応が面白い。
- 熱狂できるものがあると得られるものがある。
- 学びの選択肢があること、選択できる環境があることが大事。
- 学びとは生きる術。ＡＩ技術が進展する中で、人間は何を持ってこの社会の一員として生を全うするのか。
- 人やまちなど、リソースがあるまち、それが松本。活動する人がつながっていく、松本という都市の規模感が面白い。
- 人と話すことで、背景が見えてくる。“こういう人たちがいる”ということを知ることで、地元への愛着が湧いていく。ただ、普段そのような人に出会う場がない。
- 学都の「学」が大切であり、根幹である。かつての松本は、ここが基盤だった。
- 県立高校を、昔のように市立に戻してはどうか。そうすることで特色が出せるのでは。学校として魅力のある高校があるが、特に私立に多い。
- あらゆる場所に出向き、参加することで初めて得られる学びがあることを実感し、大きな気付きがあった。このような経験ができるとよい。
- 地域と大学生の交流はあるものの、なかなか発展しないと感じる。地域の行事などに参加する中で、若者が役割を持ち、そこから主体性が生まれるという流れをつくりたい。
- 学びは、そもそも普段の生活や営みの中に自然にあったはずだが、わざわざ「学ぶ」ものになって

しまっている。例えば、ダンスは、非言語コミュニケーションとして、根源的な表現の一つだったが、いつからか「ダンスとはこういうもの」、「これが素晴らしい」と正解のようなものができてしまっている。

- 「表現してよい」という学びが必要。自分が思ったことをありのまま表現してよいと感じられる体験が少ないのではないか。「『正解』はない」ということを幼少期から感じられるとよい。
- 学びには適切なタイミングがあり、きっかけづくりが重要となる。
- インターンシップ制度がある中で、実際の仕事の泥臭さや、うまくいかないことから学ぶ機会があるとよい。
- 短期的に評価をされる状況にあり、短期で成果を出さないといけない、失敗が許されないという状況では学びは生まれないのでは。

⑶　リレートークでの主な内容

- 「学都」と聞くと、旧開智学校をはじめとした松本の歴史や、学校教育をイメージしがちである。これまで築いてきた歴史や文化を大切にしながらも、レガシーだけにとらわれず、これからの時代における「学都」のあり方を考えていく必要がある。
- 子どもたちに「何を学ばせるか」「何を学んでほしいか」という大人側の思いが先行していないか、という視点も重要である。
- 学びには、「するための学び（Learning to do)」「知るための学び（Learning to know)」「共に生きるための学び（Learning to live together)」「人間らしく生きるための学び（Learning to be)」といった４つのスタイルがある。他者との違いを認め合うことや、身体性を伴う学びも含めて、学びを広く捉えることが大切である。
- ＡＩの進展などにより、これまでの学力観や能力観も変化していく中で、「身体」は重要なキーワードになる。決まった一つの正解から自由になり、それぞれが持つ身体の特徴も含め、ありのままの自分でいられることが大切ではないか。
- 学びは、子どもや若者だけのものではない。６０代、７０代なども含め、誰もがもう一度自分自身を見つめ直す機会が、まちのあらゆる場所にあるとよい。「学都」を場所や制度として捉えるのではなく、「学ぶ人であふれるまち」として捉えてはどうか。
- 多文化共生についても、教育の中で知識として学ぶだけではなく、日常生活の中で多様な人や価値観に自然に触れることが、理解につながる。こうした多様性を受け入れる寛容性も、松本というまちが持つ大切な要素ではないか。
- 基本構想２０３０では、「三ガク都のシンカ」を実現するための行動指針の一つとして「みとめる」がある。「みとめる」という視点は、２０４０年に向けて舵を切っていく上で、重要な都市のカルチャーになると思う。教育制度やコンテンツだけではなく、都市全体を貫く空気感にちょっとした仕掛けを加えることで、一人ひとりが自分自身を知り、ありのままの自分を受け入れ、自分を好きになれるようなまちにつながるのではないか。それは観光客にとっても同じであり、「自分をありのまま受け入れ、好きになり、帰ってこられるまち」になる。
- 学びが様々な産業と結びつくことで、松本が教育のフィールドとして選ばれるようになる。学びを教育分野だけで閉じないことがポイントであり、それが「学ぶ都のシンカ」につながる。そのよう

な環境に身を置くこと自体が、子どもだけでなく大人にとっても学びとなる。こうした視点を、基本構想２０４０に向けた土台としていくことができるのではないか。

- 今後に向けた視点として、①まちづくりの中心に「学び」を位置付ける挑戦をしていくこと。「学都」と聞いたときに、場所ではなく「人」が思い浮かぶような、学ぶ人であふれるまちを目指すこと。②人や分野を「分ける」ことから「混ぜる」ことへ発想を転換すること。③学びの過程で、対象や他者、自分自身とどのように向き合うかを大切にすること。の３点が挙げられる。
- 今回の議論は抽象度の高いものであったが、今後、「学ぶ人であふれるまち」という方向性を共有できるのであれば、次回以降は、その実現に向けた仕組みや取組みについて議論していきたい。時代の変化を見据え、今のうちに議論・整理し、あらかじめ準備しておくべきことを、シンカ会議で考えていくことが重要である。